



TITLE:

ザアバの教育論

AUTHOR(S):

金子, 奈央

CITATION:

金子, 奈央. ザアバの教育論. CIAS discussion paper No.32: 「カラム」の時代Ⅳ--マレー・ムスリムによる言論空間の形成 2013, 32: 28-35

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228592>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

ザアバの教育論

金子 奈央

1. はじめに

本稿は、『カラム』誌におけるザアバ(Za'ba)ことザイナル・アビディン(Zainal Abidin bin Ahmad)が執筆した記事のうち、1953年4月から8月までに掲載された連載「イスラムにおける基礎道徳：子どもに対する教育」(Asuhan budi di dalam Islam: Didikan kepada anak-anak)を取り上げ、その連載内容の紹介を通してザアバの子どもの教育に関する議論について整理する。

ザイナル・アビディン・アフマド(ザアバ)

ザアバは、20世紀に活躍したマレー・ムスリム知識人である。彼は、教育者であり、多くの著作を残した文筆家、思想家でもあり、また、マレーシアの国語としてのマレー語文法の基礎を築いた人物としてもよく知られている。彼は1895年にヌグリ・スンビランで生まれた。12歳の時から、バトゥ・キキール、リングという2つのマレー語学校で学んだ後、スレンバンにあるセント・ポール・インスティテュションという英語学校で学んだ。1915年、ザアバはヌグリ・スンビランのマレー人として初めてケンブリッジ上級試験に合格し、教育課程を修了した。

その翌年、ザアバは教育者としてのキャリアを開始した。まず、ジョホール・バルに英語教師として赴任した後、1918年にはペラのクアラカンサーのマレー・カレッジでマレー語の教員として教鞭をとった。1923年に教育局の翻訳課に異動し、その翌年タンジュン・マリムにあるスルタン・イドリス師範学校に移り、1939年まで勤務した。ザアバは、スルタン・イドリス師範学校の在職中にマレー語文法規則の統一に励み、その文法規則を用いた学校の教科書や一般的な読み物を出版した。1947年にはロンドンの大学で英語講師を勤め、1953年からはマラヤ大学(シンガポール)で教鞭をとった。ザアバは教育活動以外においても多くの貢献を果たした。1937年にはペンフレンド協会の会長

を、1945年にはスランゴール州マレー人協会の会長を務めた。1946年、彼は統一マレー人国民組織(UMNO)の党憲章草案委員会のメンバーとなった。

ザアバは、自らの著書を出版する傍ら、新聞や雑誌に自分の見解を書いた記事を多く投稿し、掲載された。ザアバは、マレー人社会に蔓延る社会的病やイギリスの植民地支配を批判するエッセイを書いた。『カラム』にも多くの記事を投稿しており、1951年5月から1955年8月までのほぼ毎号に、自ら執筆した記事を投稿している。投稿された記事は、ザアバの専門分野であるマレー語、マレー文学に加え、イスラムに関するものも多く書かれている。イスラムに関する記事は、イスラムの教えに基づく道徳精神や正しい生き方を身に付けることに関連するものが多くみられる。

『カラム』の時代を代表するマレー・ムスリムの知識人であり、教育者であったザアバが、その時代のマレー・ムスリムコミュニティや、彼らが受けている／与えている多様な教育に対してどのような問題意識を持ち、どのような教育論を展開していたのか。それを考察することは、『カラム』の時代のマレー人コミュニティに纏わる教育問題や教育議論を共有する重要な手助けとなるであろう。本稿では、以下、『カラム』に掲載された「イスラムにおける基礎道徳：子どもに対する教育」の記事を日本語訳して紹介する。

2. 「イスラムにおける基礎道徳：子どもに対する教育」の記事

第1回「両親は子どもたちにとって(人生)最初の教師」(第33号、1953年4月)

我々の預言者によって読まれたハディースやクルアーンでは、それぞれ子どもたちはまさしく純粋なる宗教の下に生まれた、それはつまり、過ちも罪もないため、清らかで、正しく、よい状態にあるとされている。その後、成長の過程で、子どもたちに変化が生まれ、正しい道から逸れて彷徨うことがあるのは、生後にもたらされた「子どもに対する」しつけや教育がよ

くなかったことに起因する。子どもは、〔自分たちの〕父や母によって与えられた手本と教えによって形成される。正しいイスラムの中で子どもを育てれば、子どもは正しいイスラムの中で生きるだろう。イスラムの教えに基づく決定に従うと、生まれた時、清らかで誠実だった子どもが素晴らしく立派な立ち振る舞い出来るか、邪悪で恥ずかしい立ち振る舞いをするようになるかは、両親から躰を受けたか、躰が不十分であったか〔日常的に正しい見本を両親に示してもらったか、また両親が正しい見本となっていたか〕による。

家庭は、子どもたちにとって人生で最初に出会う学校〔学びの場〕であり、人生において自分がどのように行動すべきかについて学ぶ。また、両親は、〔家庭という〕学校において〔子どもたちの人生で〕最初の教師となる。〔第二の学びの場となる〕学校という場合は、一般的に、書くこと、読むこと、計算することなど知識を学ぶところである〔一方で、人生最初の学びの場である家庭は、道徳を習得する場所である〕。もし、家庭で受ける躰や教育が適切でない、または、良いものでなければ、子どもたちが成長した後、〔その家庭教育は〕彼らを「非常識」、信用のおけない、正しくない人物にするだろう。家庭で長らく大いに影響を受けてきた教えや模範が子どもたちの中で体得できていないのであれば、〔家庭よりも短い期間、それ故の少ない影響力という条件下であるので〕学校において、教師たちが発した言葉や、示した模範例を通して、子どもたちが学んだ道徳規範を、彼らが自分のものとして、しっかりと体得するのは難しいだろう。

学校が子どもたちを右に導いても、家に帰宅して、家庭で両親から示された教えが、子どもたちを左に導くものであれば、子どもたちは左へ行くだろう。家庭や、学校外で与えられる影響に比べた時に、学校で学ぶ時間は大変限られている、1日に学校にいるのは、せいぜい5、6時間で、それ以外の大半の時間は、学校外で、両親とや友人たちと共に過ごすことで消化されていく。どちらが優勢か〔子どもの道徳形成により影響を与えるのは学校か、家庭を含む学校外か〕は明白だ。学校で教師が子どもたちに整理整頓、身のまわりを清潔に保つことを説いたとしても、家庭で両親がそれを実践しておらず不潔であれば、どのようにして2つの学校〔学校と家庭〕の間で足並みを揃えることができるのだろうか。家で両親が「ちくちょう」という言葉〔汚く罵る言葉〕を意味も分からずに使っているのを常に子どもが聞かされていたら、両親が常に自分〔子

ども〕を汚い言葉で罵っていたら、例えば、学校で〔そのような言葉を使って人を罵ることを〕禁止したとしても、子どもたちが、両親の真似をするのを、どのようにして防ぐことが出来ようか。

家庭における子どもの躰、教育に関しては、母親が最も責任、役割を担っている。何故ならば、家族を養うために働きに出ている父親が子どもたちと接する時間は、母親に比べて少なく、子どもたちと共に過ごす時間が最も長いのは母親であるからだ。父親は、家庭の中で最も大きな力を持ち、最終的な助言や意思決定を行う。預言者の言葉において、母親はイスラムの教えにおいて大変尊重される、とされている。子どもの躰や教育についての責任を担う母親の地位は高い。西洋人の格言でも「ゆりかごを揺するその手は、世界を統治する」というものがあり、これは、良き母に育てられた者は、世界の国や人々を統治するような高い地位に上りつめる人となることを意味している。もし、母親が正しい教えを与えなければ、その全てはやってこない。今現在の進歩の時代において、最善を尽くして子どもの躰や教育に関する責任を全うすることが、母親には求められている。そのためには、母親も教養を持つことが求められており、つまりは、台所、家の周りの身近な場所、自分の住んでいる村より広い世界の情勢についての知識を持つこと、華美に着飾ったり、西洋の性質を模倣したりすることだけに気を取られていないで、その他にすべきことに対する責任を全うすることなどが求められている。〔子どもの躰や教育に対する〕母親の重要性は、ますます高まっており、子どもを正しく教育するために適切な教養を母親も身に付けるべきである。

第2回「教育を与える方法」(第34号、1953年5月)

「神の方法」とここで呼ばれるものは、つまりは「イスラムの方法」である。これはつまり、今世および来世において、繁栄や幸福をもたらす一連の教えのことである。従って、ここには子どもたちに礼儀正しい立ち振る舞いを教えることも含まれる。もし、このクルアーンの章句の内容に注意を払っているのであれば、粗暴さや凶暴的な立ち振る舞いを身に付けることを、我々がすすめることはないし、認めることもないだろう。ここで我々が対峙する問題は、子どももの教育に関するものである。

両親は、子どもの躰や教育を、厳しすぎたり、粗暴な方法で行うべきではない。子どもたちも、我々と同様

に、考えることを知り、怖い、恥ずかしいと感じたり、みじめだと思うことを知っている人間であるので、子どもを心身ともに傷つけるような暴力でもって、それを教える必要はない。一方で、子どもに教育する場合、甘やかしすぎるようなやり方もするべきではない。すべての子どもの欲求に従ってしまったり、全ての子どもの気まぐれを放ったらかしにしたり、子どもがほしいと思うものすべてを買い与えたりすることは、してはならない。厳しすぎることも、甘やかしすぎることも、子どもの教育方法としては正しくない。正しい方法とは、預言者の言葉にあるように「知的な方法」を用いることである。しかし、実際はこの「知的な方法」の理解についても間違っている人がたくさんいる、特に今の時代に求められていることに適応させることが出来ていない。

もし、子どもが正しい教えに従わない時には、両親は実際のところ、子どもを厳しく叱りつけることができる、またそれが出来るだけの力を持つということを子どもに認識させなくてはならない。子どもを躾ける場合は、常に厳しく子どもに接するのは適切ではない。もし、子どもが〔親の〕言いつけにしっかり従うことができたなら、優しく接することも大事である。子どもを厳しく躾けた後に、子どもがしっかりとその言いつけに従った場合は、子どもに何故、自分たち〔両親〕が先ほど厳しく子どもたちに接したのかについて説明するべきであり、親の言いつけを守らないことがどれほど間違ったことか、〔自分が両親に〕厳しくされなければならなかった正統性はどのようなものであったのか、についても明確にするべきである。子どもが言いつけをしっかり守った場合には、子どもを褒めるべきである。子どもは褒められるのが好きであるので、子どもにとって、良い行いをすることの大きな励みとなる。

今の時代の子どもたちは、常識を身に付け、自分で自分のことを良く考えるよう訓練されることが、幼い頃から求められている。大きくなってからは、常に自分の意志を持ち、イニシアティブをもって、率先して自分の仕事を行う性質を持つことを求められるだろう。それぞれの立ち振る舞いが、吸収すべき良いものなのか、断つべき悪いものなのかについては、可能な限り、子ども自らの考えや常識で判断が出来るような癖をつけておくべきである。また、良い行いをするのは、その行いが正しく、尊いものであるから行うのであり、見返りや褒められることを求めて行っていく

ないし、一方で、悪いことをしないのは、侮蔑されたり、非難されたり、殴られたり、痛みを伴うのが怖いからではなく、その行いが悪いものであり、恥ずべきことであると自ら考えるからでなくてはならない。成長後の善悪の分別は、以上のような判断で自ら行わなければならない。そのような人間〔大きくなった際、自らの判断に基づいて、良い行いを近づけ、悪い行いを遠ざけることが出来る人〕に子どもするためには、既に自分で考えることを始めた子どもに対して、チョコレートや新しい服を買い与えることを約束して、良い行いをするをを求めることは正しくない。また、悪いことをしてはいけないと教える際も、「父が怒る」、「後で殴る」、「そこで遊ぶのはやめなさい、オバケが出る」と言って、子どもを怖がらせる〔ことによってやめさせる〕のはよくない。また、子どもを侮蔑するような言葉を用いるのはもっと悪い。そのようなやり方は、その父親や母親の、子どもに対する教育の程度が低いことを示すだけであり、そのレベルの行動を後々子どもがするようになるだけである。

クルアーンにおいては、預言者ムーが洪水の際、どのようにして息子を船に乗るように説いたかについて書かれた章句や(11章42-43節)、ルクマーンが彼の子どもにどのようにして神と一体になることができるか、について説いた章句(31章12-19節)で、子どもたちがみずから適切な判断をすることがなぜ重要なのかについての教が書かれている。また、アル・ガザリ¹も、「苦痛な勉強だけでなく、子どもには遊ぶ時間も必要である。そうでないと、ただ勉強をするだけでは、彼らの活力は損なわれ、愚鈍で聡明でない人間に成長してしまう」、「しかし、衣食住についても同様なことが言えるが、快適な条件を子どもに与えるだけではよくない。必ず、困難な状況も与え、忍耐力を子どもに付けさせなければならない」と言っている。アル・ガザリの言葉は、既に約900年ほど前のものであり、現在、我々が享受している教育環境は大きな発展と進歩を遂げている。しかし、彼の言葉は、今日の状況についても適応可能なものである。

第3回「子どもに善悪を教える」(第35号、1953年6月)

子どもにどのように善悪の分別を教えるかは、子どもたちの将来に大きな影響を持つ。子どもの頃に

1 アブー・ハーミド・ムハンマド・イブン・ムハンマド・ガザリー(1058-1111)は、ペルシアのイスラム神秘主義者(スーフィー)で、イスラム神学者であり哲学者。

受けた躰によって身に付けた性質は、大人になっても変わらずに残るものであるからだ。もし、正しくない躰を受ければ、正しくない人間性を身に付けて大きくなり、後々改めようとするのは困難である。幼い頃に正しい教育を子どもに与えることは大切であり、その後、長い年月を経ても、子どもは、その〔正しい〕性質を身に付けたままであり続けるだろう。子どもを正しい人間に育てるためには、模範や、手本となる行動を実践することが求められる。言うだけ、助言するだけでは十分ではない。手本を子どもに見せる機会が最も多いのは両親である。子どもは長時間、両親の行動を見ることができ、両親の話していることを聞くことができる。様々な見本となる行動や言動が子どもたちに理解され、彼らの五感に吸収される。両親から得たこれらの見本は、〔子どもたちにまねをさせいと〕すすめたり、強制したりすることはしなくても、自然と子どもたちを形成する一部となる。

子どもの躰には、三つの段階がある。これらの段階は、クルアーンの中で神によって示されたイスラムの教えに基づいている。まず、最初の段階は、targhib(良い励まし)と言われる段階で、子どもが好きな褒美や報酬を用いて、子どもに躰を行う段階である。ただし、この段階を用いることが可能なのは子どもの人間形成に関する方向性を容易に変えることができる時期までである。子どもが知能をつけ、自ら考えることを始めたら、この方法を用いることを辞めなくてはならない。

第二の段階は、子どもがもつ「恐怖」の感情を利用する段階である。この手法を用いる段階は、子どもが少し大きくなって、拒絶したり、言いつけを破ったりし始めてはいるが、まだ「危険」や「怖い」といった感情に容易に影響されやすい時期に用いる。この段階を用いる子どもたちは、まだ根気も強くなく、思慮も浅く、知識不足でもある。従って、知識や思慮を用いて、その場を自らの力で乗り切るほどまでには至っていない。ただし、子どもの恐怖感を常に使って躰をする必要はない。子どもは、永遠に幼いわけではなく、考えることを知らない愚か者でもない。彼らが既に考えるということ覚え始め、自分の思考を発達させ始めたら、〔子どもを〕怖がらせる方法を用いて躰を行うことは適切ではなくなる。

第三の段階は、これまでの二つの段階よりも、子どもがより発育した状態になった時に用いるもので、子ども自身に判断することを求めるものである。子ども

が自分の身によく起きる些細な事柄に関しての善悪の分別、適切かそうでないかを判断することを始めたら、この段階に入ったことになる。この段階を適用しはじめるのは、6歳から8歳の間である。子どもは既に「分別のつく」段階に入っているの、この時は彼らを更に成長させるような可能性へ導くべきだ。この段階に入った子どもたちに躰をする際は、少しずつ良いことと悪いことを子どもたちに理解させよう。

これまでの三つの段階の中で、この最後の段階が最も重要である。この段階を経て、子どもたちは大人へと成長していく。第三の段階で用いられる方法は、昔も今もよく教育された人々にイスラムの教えを説く方法として最適なものであった。何故ならば、この方法は自らの判断や思考を用いて、「正義感」を涵養するからである。この方法を用いて、子どもの頃から教育することができれば、後々、健全な精神や思考が子どもたちの中で結実するであろう。

二つの結論を最後に記して、この記事を締めくくる。まず最初は、幼い頃から子どもの子心の中に留めさせるべきことは「他の人からしてもらって嬉しかったことを、自分も他の人に対してすること」、「他の人が自分にしたら嫌なことは自分も他の人にしないこと」を覚えさせるべきである。二つ目は、褒美や報酬がほしいからという理由に基づいて、良い行いをするとように教育しないこと、また、悪いことを何故してはいけないかについても、怒られたり、罰せられたりするのが怖いからというようにしてはいけない。良いことをするのも、悪いことをしないのも、神のためであり、神がそれを望まないからである、と考えるべきである。より良い人生を子どもが送ることができるように、適切な善悪の分別や、適切な判断力、思考力などを身に付け、それらが正しい行いを決める指針となるように、しっかりと両親は子どもに教育をするべきである。

第4回「家庭の役割」(第36号、1953年7月)

マレー人の母親たちが、子どもの躰や教育を家庭における仕事の一部として話をしているのを、私はまだ聞いたことがない。清潔な状態を保つことの義務と、その義務を全うするためには、どのようなことを実践すべきかについて言及されることはあったが、物理的な清潔に関するものばかりで、心や内面の美しさ〔清らかさ〕を、どう教育すべきかということに少しでも

触れているものもない。彼女たちの多くは、自分の家の整理整頓については触れるが、家族が躰を行うべき自分の子どもの道徳心〔心の純潔さ〕や、自分自身の人間性をどのように整えるかについては触れない。

時々、彼女たちが義務という観点から、〔家族を〕病気からどのように守るか、また、万が一病気を患った時は、それはどのように治すことができるか、について言及することはあり、病気の原因を、お化けや人為的なものであると信じる現状や、イスラムの教えとは相反する霊媒師文化の信仰の愚かさについて語ることがはしない。これらは全て、子どもが正しい思考を身に付けた人になるよう導くための、子どもの教育の一部に含まれる。従って、子どもの躰は、家庭がその役割を担うことが適切である。

以前、「家庭」をテーマにしたマラヤのラジオ番組で、一人の母親が話をしていた。最初、彼女は、子どもにとって家庭は人生最初の学校であり、母親は、子どもに躰や教育を行う最初の教師であると話をしていた。しかし、その後彼女が話していたことは、家事に関することで、その内容は、以下の二つに集約することができる。まず、第一の仕事は、夫や子供の食事の用意をすること、そして二つ目の仕事は、彼らの身だしなみを整えるために衣服に気を払うこと、であった。この仕事を全うすることが、家族全員の生活を快適にすることに繋がると彼女は言った。家を清潔に保ち、整理整頓すべきということも多少は言及しているが、やはり、物理的な清潔さについてのみ話をしただけであり、子どもに正しい道徳心を教える必要性や、それを母親が家庭で行うことが、彼女たちの任務であるということは全く言及されなかった。この母親がラジオで話した、家庭における母親の二つの役割が重要であることは疑う余地はない。しかし、子どもに正しい道徳心を涵養することも、家庭で母親が担う役割としては大変重要なことである。子どもに正しい道徳精神を教育することは、我々大人の義務であり、それは家庭が責任を担うべきことである。何故ならば、このような躰をできる場所は家であり、子どもにそれを与えることができるのは両親、特に母親であるからだ。

礼儀正しさと謙虚さ、良き行いを好み、悪い行いを避ける態度などを身に付ける大切さを説いているイスラム教徒がいる。彼らが用いる〔それを子どもに身に付けさせる〕方法は、褒美を与えること、恐怖感を用いることが基本となっている。人間が習性として身に付けることができる理性、思考力、正義感による方法

を〔そのイスラム教徒たちが〕用いようとしたことはない。更には、彼らの説く教えは、常に一連のウラマーのキターブや、言葉、理解、といった枠内で行われ、その外に出ることはない。

しかしながら、時々、これらのウラマーの見解が時代遅れで、既に廃れたものであることがある。今の時代に関する事柄や、ニーズにはそぐわない。彼らは自らの考えを掘り下げたり、自分の判断に基づく説明、見解を示したりする自信がない。従って、理性に基づいて、すすんで行うべき良いことや、遠ざけるべき悪い行いについて、彼ら自身の言葉で説明することができない。しかし、彼らが用いている方法は、理性で考えることを知っている子どもたちや若者を教育する方法としては、既に「お話にならない」ものであり、使えるものではない。理性でものを判断することを知っている人々は、ウラマーの言葉に盲目的に従うことはないし、ウラマーの言葉を盲目的に信じている人の教えは受けないであろう。

母親が家庭で行うべき仕事において、大変重要なのは正しい行いをし、正直に話すことのできる子どもを教育することである。母親だけでなく、父親にも、家庭における子どもの教育に対する責任はある。父親や母親が、子どもに教育すべきことは一から十までである。もし母親が、家族の衣食の管理のみ責任を担っていて、父親が金銭の面のみで責任を全うすることに励んでいて、どちらも子どもの躰についての責任を持つとしなければ、それは家庭において親が担うべき責任を完全には全うできていないことになる。

子どもにあらゆる正しい道徳精神や品行を躰けることは、子どもが幼い頃から行うべきである。また、その方法は、「褒美を与える」、「罰を受けることへの恐怖感を利用する」、「子ども自身の中に芽生えている良心や正しい判断力に頼る」などがある。褒美や恐怖感の利用だけでは、それぞれ、子どもを甘やかすだけ、厳しめるだけになってしまう〔従って、三つ目の「子どもの良心や判断力に頼る」ことが、正しい躰には最も重要な手段となる〕。子どもたちに良い躰と教育を行う適切な方法については、これまでの〔本連載の〕他の記事でも既に述べてきたので改めて繰り返すことはしたくないが、時々、間違った方法で子どもの躰が行われているので、子どもたちの中に正しい形で吸収されていないこともしばしばある。

学校に子どもたちを通わせる目的は、よい仕事に就くため、高い給料を得るため、楽な生活をするため、と

言われることが多い。正しい行いや道徳精神を学ぶため、というのは学校に通う目的にはならない。しかし実際は、学校で身に付けた知識や教養は、高い地位、給料、利益を得るためだけのものではない。このような考え方〔学校に通う理由は物質的な利益を得るため〕は、西洋の「快樂主義」てきな考えによるものであろう。しかし、東洋哲学やイスラムは、それとは異なる。我々が学んだり、知識を得るのは、世界の人々を助けるのに役立つ賢さを身に付けるためである。よりよい精神、倫理、理性、思考などを身に付けるのも、他の人の助けになることをするためであり、自らの私利私欲のためではない。子どもたちの中でも、学校教育を受ける理由について、「よその金」をたくさん得られる仕事を持つため、という間違っただけの考えを持つ者がいる。この「よその金」とは賄賂金のことであり、正規の仕事で得た仕事以外に、他人が法や正義から外れて利益を得ることを手助けした見返りに、その人たちから受け取るお金のことである。このような考えを持つ子どもが育った原因が、「家庭における両親の躾や教育が不十分だったから」ではないと言うことは出来ない。

責任ある態度についても、もし母親や父親が責任感のある、信頼できる人間であったとしても、子どもにそれをしっかりと教えていなければ、子どもが父親や母親と同様の人間にはならない。責任感の欠如した、信頼に値しない人間には、組織や他人の金を任せることは出来ない。彼らは、限度額以上の金を無駄に使ってしまうだろう。浪費、散財、借金癖、貯金が苦手、といった性質が身につけてしまうのは、全て家庭において日常的に両親から来なかった、または正しいお金の使い方の規範を両親が示してこなかったことに起因する。子どもが正しい道徳精神や品行を身に付けるように両親が正しい躾を行うことは、家庭が担う役割の最も大きな役割のひとつである。

第5回「子どもに対する親の義務」

(第37号、1953年8月)

「神のみ崇めよ。両親に孝行せよ」と、神はクルアーンの中で説いている。もし、両親のどちらか、または両方が間違っただけの行いをしたとしても、子どもは両親を乱暴な言葉で叱るのではなく、優しい言葉で、両親を敬う心を忘れずに、注意をするべきであろう。子どもは〔間違っただけの行いをしている〕両親に完全に服従することはせずに、「我々の神よ」と、神が両親に正しい教えを与えて下さるよう祈るべきだ。クルアーンの中

のその他の章句や、ハディースにおいても、「子どもは両親を尊び、両親に従うべきである。ただし、両親が神に背くような悪行や、間違っただけの行いをするように、子どもを導こうとした際は、それに従うべきではない。しかしながら、例えば両親が間違っただけのことをしようとしていたとしても、子どもは両親に孝行すべきである」と説いている。

ムスリムは、それぞれ、両親に対する子どもの義務について良く知っているし、両親も、それについては良く理解している。これは、非ムスリムや、上記のクルアーンの章句について、あまり理解していないムスリムであっても知っていることだろう。民族や宗教、時代を選ばず、この義務については広く皆に認知されている。しかし、多くの人が親も子どもに対して負っている義務があることを知らない。もし、知っていたとしても、十分に理解をしていないことが多い。子どもに対する両親の義務については、クルアーンやハディースの中で、〔子どもの両親に対する義務のように〕言及されてはいない。しかし、神の定める法において、「権利を持つことは義務を負うことでもある」とされており、つまり、人が権利を持つとき、同時に他の人に対する義務を負っているのであり、他の人の権利に対する責任を全うするのは、自分に与えられた権利を保証するためでもある。

我々は権利を、無償で、無条件に、与えられているわけではなく、この世界において我々に与えられている場所や時間でさえも、それに対する代償を我々は払うことで借りることができているのである。自分に与えられている全ての権利や利益は、自分が他に人に与えている権利や得に対する見返りである。我々の権利が、他の人の義務の上に成り立っている時、必ず他人の権利は我々の義務の上に成り立っている。親と子供の関係も、これと同様である。もし、子どもに正しい人間になってほしいのであれば、正しい教育を子どもに与えるという親としての義務を果たすべきである。

ここでいう教育とは、子どもに食べさせ、子どもの身体を成長させることだけではない。それだけでは、子どもたちの精神や心は教育していないからだ。もし、不十分な教育しか与えず、親としての義務を果たさなければ、子どもは親に対して不義理をするようになってもおかしくない。多くの母親や父親は、自分たちに対して子どもが負っている義務のことしか知らない。自分たちは、親として、子どもに対する義務を果たさず、子どもの権利を親が重んじることをせず、

子どもに食べものと飲みものを与え、子どもの身体の安全に気を使うのみであったとする。彼らの子どもが、大きくなった後、子どもの親に対する義務に則り、彼らは金銭などの見返りを自分の子どもに求めた。それに子どもが応じなかった時、彼らが過去に子どもに対して行ってきたことを蒸し返し、「大変な思いをしてお前をお腹の中で9か月育て、お前を育てるのに、これまでどれだけの苦勞をしてきたか、今度は、お前がその恩に報いるべきだ」と言ったとしよう。

彼らの子どもが不義理な人間に育っていたら、おそらく、「誰が自分を生んでくれと進めた、誰が月や太陽を見るために自分を外へ連れて行ってほしいとお願いしたか、私はお願いしていない。子どもの頃、私に快適な生活を与えたか。もし、私を育てるのが大変だったというのであれば、風私が産まれてくる際、送り返してくれなかったのか」と、答えるだろう。これらの様々な質問に、両親は答えることができないのではない。しかし、子どもが、このような不義理で不実な人間になった原因は、そもそもどこにあるのか。この両親が、親として〔子どもから与えられるべき〕権利を享受できず、子どもからこのような言い方をされてしまうのは、彼らが子どもを産み、身体的成長させただけであるからで、つまり、それは自分のやりたいように子どもを育てただけであり、子どもに頼まれたからでも、すすめられたからでもない。

子どもを産み、大きくするだけではなく、人間として正しい子どもに育てる親としての義務を全うすれば、子どもは親に逆らおうとしたり、不実なことをしようとはしないだろう。子どもが親に不遜な態度に出るのは、子どもが幼い時に、両親が正しい道德規範や品行について、子どもに教えなかったからだ。子どもの親に対する不遜な態度は、他人によって〔学校教育の過程などで〕植えつけられたものであるが、自分の子どもが学校教育を受けてた際、親たちは、〔どのような道德規範を、どのように教えられているか〕あまり関心を持ってこなかった。それにもかかわらず、突然、金銭や見返りを子どもに求めても、子どもが困るのは当然である。良く考えてほしい。もし、両親が十分に子どもの躾や教育に関する義務を全うせずに、子どもから与えられる権利のみ得ようとするのは正しい姿か。もし、適切な教育を十分に子どもに与えることが〔当時〕できていれば、子どもから与えられる親としての権利を享受することは確実に出来たであろう。

両親に与えられることが望まれる神の慈悲の程度

は、彼らが自分の子どもにどの程度正しい教育を与えてきたかによって決まる。もし、多くのことを子どもに教えることができていなければ、その分、多くの慈悲が神から与えられるだろう。しかし、不十分な教育しか子どもに与えることができていなければ、神から与えられる慈悲も少なくなる。もし、子どもを乱暴に扱ったり、怖がらせたりしていたとしたら、神からも同様に扱われる。もし、子どもに、その気持ちがあれば、親の恩に報いろうとするだろう。親が、子どもに自分が与えた恩に報いるように言うてはならない。自らが教えた知恵について、言及したり、掘り返したりするのは、知性ある人間のする行いではない。神の言葉の中にも「知性のある人は、あなたが知恵を授けた人の心を傷つけたり、責めたりしてはい」とある。これは、自分の子どもに対してもそうでなければならない。

子どもたちは各々、〔特に良い教育を受けたものは〕勧められたり、お願いされたり、言及されたり、思い出させたりされなくても、両親に孝行し、従い、愛情を持って接したいと思っている。更には、良い教育を〔親から〕受けてこなかった子どもであっても、両親に良くしたいと考えている。何故なら、両親に対する忠誠心や愛情といった感情は、自然と湧き上がってくるものであり、人間の中に育まれているからである。同様に、子どもを愛し、幼い頃から子どもを守り、育てることに対する〔親としての〕喜びも、親は自然と持っているものであり、神が両親の中に涵養したものである。

子どもが成長し、自分で考える力を持ち、自らで責任を負い、自分で困難と対峙できるようになった時、両親は、自らが望んで、子どもに行ってきたことを、掘り返してはいけない。一方で、既に成熟し、知性を身に付けた子どもは、友人のように、両親と共に話し合い、議論する態度を身に付けるべきだ。時々、子どもの考え方や判断が、両親よりも賢明で、よりの確であることもある。既に成長し、自分で考えることを覚えた子どもを、再びコントロールしようとしたり、手荒な方法や、幼い頃の借りを蒸し返して、子どもを服従させようと、両親がしようとしたら、それを子どもが受け入れる必要はない。例え、子どもが、まだ幼かったとしても、乱暴な手段は子どもに使うべきではないが。

我々が、これまで話してきた子どもの教育についての〔大人の〕責務の全ては、息子に対しても娘に対しても同様である。性別の違いに起因する〔子どもたちの〕性格の違いや、目的の違いはあるだろう。従って、それに対応した形で、それぞれに対して、ひとつひとつ

のことを教育することが求められる。

おわりに

本稿では、1953年の4月から8月の間に、5回にわたり掲載されたザアバの連載「イスラムにおける基礎道徳：子どもに対する教育」を取り上げ、その連載内容の紹介を通して、ザアバの子どもの教育に関する議論について整理してきた。イギリスの植民地支配から脱し、ひとつの国家として独立をしようとしていた1950年代前半に、ザアバは、マレー・ムスリムコミュニティの子どもたちを、イスラムの教えに基づいて、どのように教育することが正しいと考えていたのだろうか。

ザアバは、これまで学校教育の実践や教育行政の現場で活躍してきたマレームスリムの知識人であり、教育者である。彼が残した功績もまた、マレー語やマレー文学などが多く知られている。しかし、この5回の掲載記事の中で学校教育の重要性については一切言及しておらず、また、イスラムと学校教育の関係についてもほとんど述べられていない。イスラムの教えを「正しく」子どもに伝達し、子どもがそれを正しく理解し、正しい人間となるためには、家庭における教育が重要であり、その責任は両親が負っているという主張を、第1回から第5回まで一貫して展開している。子どもの躾や道徳教育は家庭における両親の仕事であるという意識がない大人が多いことをザアバは問題視しており、繰り返し、イスラムに基づく子どもを正しい人間へと導く教育は家庭で両親によってなされるべきであり、それは両親が負った責務であり、子どもが、正しい道徳精神や品行を持つ人間になれるかどうかはほとんど親にかかっていると説く。その上で、子どもに正しい行いや精神を教育する過程で、まだ子どもが幼い頃は「褒美」や「恐怖を与える」といった方法を通して教えることもやむを得ないとしているが、子どもが成長した後も、子どもが善悪を分別する理由が「褒美」であったり「恐怖から逃れたい」といったものであってはならないとしている。従って、最も重要なのは、子どもが自ら考え、判断できる力を身に付け始めたら、善悪の分別を付ける際は、自分の良心に基づいて考え、判断することが最も正しい人間としての方法であると教えなくてはならないとしている。ザアバは、マレームスリム社会に蔓延する社会的病理についても問題視し、批判するエッセイなどを多く執筆してきたが、正しいイスラムの教えに基づいて考え、行動する人間を教育

することがその改善策として重要であると考えたのであろう。この連載を通して一貫して主張しているのは、イスラム教育における家庭の重要性であり、両親の子どもの躾に対する義務の重さであった。

参考文献

- Adnan Haji Nawang. 1998. *Za'ba dan Melayu*. Kuala Lumpur: Berita Publishing Sdn. Bhd.
- Adnan Haji Nawang. 1994. *Za'ba Patriot dan Pendeta Melayu*. Kuala Lumpur: Yayasan Penataran Ilmu.
- Roff, William R. 1967. *The Origins of Malay Nationalism*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.
- Rosnani Hashim. 2004. *Educational Dualism in Malaysia: Implication for Theory and Practice*. Kuala Lumpur: The Other Press.